

『蜻蛉日記』を調べる

2023 年 4 月 30 日

我部山民樹

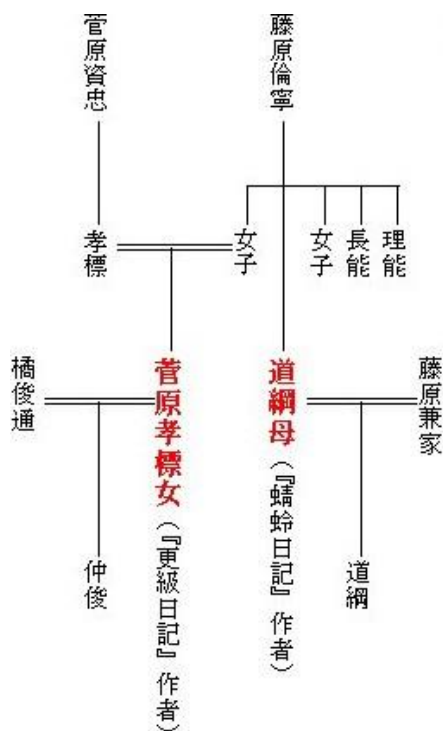
1. はじめに

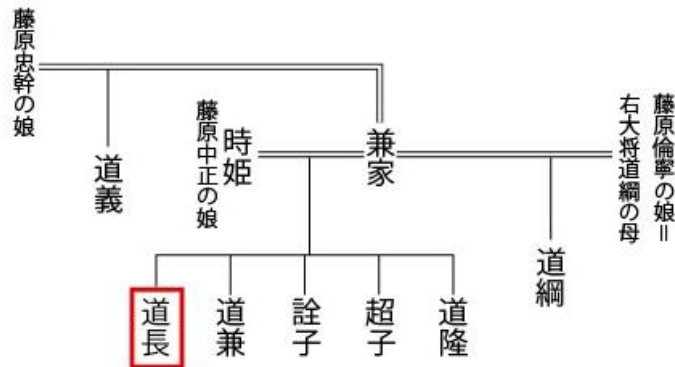
平安時代にかかれた代表的な日記は、次代順に、『土佐日記』（ときにつき）、『蜻蛉日記』（かげろうにつき）、『和泉式部日記』（いずみしきぶにつき）、『紫式部日記』（むらさきしきぶにつき）、『更級日記』（さらしなにつき、『更級日記を調べる』参照）、『讃岐典侍日記』（さぬきのすけにつき）、『建礼門院日記』（けんれいもんにつき）、『十六夜日記』（いざよいにつき）が知られている。随筆は『枕草子』（まぐらのそうし）が知られている。また、物語も多く書かれているが、そのうち、『竹取物語』、『伊勢物語』（『在原業平の実像と風説』参照）、『源氏物語』がよく知られているようだ。『源氏物語』は日本のみならず 20 か国語を超える翻訳を通じて世界各国で読まれている。（添付「平安時代の主な文学年表」参照）

『蜻蛉日記』は、平安時代の女流日記であり、954 年～974 年間の結婚生活が書かれている。平安時代の女流文学の代表的作品の一つとされている。

作者は藤原道綱母（ふじわらのみちつなのはは）で、晩年の 974 年頃に回想して書いたものとされる。当時の他の女流作家が、いずれも宮中などに仕えた女房であったのに対して、ただ 1 人家庭にあった作家としても特色をもつ。なお、作者については異説もあるようだ。

(1) 家系図





2) 作者のプロフィール

- ・平安中期の歌人

拾遺(しゅうい)集』以下の勅撰(ちよくせん)集に 38 首が入集(にっしゅう)し、その家集(王朝和歌の世界において、個人または一家の和歌をまとめて収めた家集を指す)に『傳大納言殿母上集』(フノダイナゴンドノハハウエシュウ)がある。

- ・父；正四位下藤原倫寧(ともやす、正四位下・伊勢守)
- ・母；『尊卑分脈(そんぴぶんみやく)』などに刑部大輔(ぎょうぶのだいぶ)源認(みなもとのみとむ)の女(むすめ)とある
- ・子供；藤原道綱(道隆や道長は義理の息子)
- ・姉；藤原為雅(ためまさ)の妻
- ・兄；藤原理能(まさとう)、その妻は清少納言の姉
- ・弟；藤原長能(ながよし)、中古三十六歌仙(三十六歌仙に属されなかったが秀でた歌人とそれ以後の時代の歌人)の一人
- ・妹；『更級(さらしな)日記』の作者・菅原孝標女の母

(3) 結婚生活

『蜻蛉日記』によると、20 歳ごろの 954 年に、当時第一の権勢家の右大臣藤原師輔(もろすけ)三男の兼家(かねいえ)と結婚し、翌年道綱を生んだ。

『百人一首』の有名な「嘆きつつひとり寝(ぬ)る夜の明くる間(ま)はいかに久しきものとかは知る」

(貴方が居ないのを嘆きながら一人で寝る、夜が明けるまでの時間がどれほど長いものか、貴方はおわかりにならないでしょう。)

は、結婚生活 2 年目に、兼家が他の妻に夢中になって、訪れて来なかったときに詠んだものである。

『蜻蛉日記』のなかでは、夫の足が絶えがちなのを嘆き続け、「三十日三十夜(みそかみそよ)はわがもとに」と願った話はよく知られる。兼家の早くからの妻・藤原時姫(ときひめ)と北の方(正妻)の地位を争ったが、多くの子女に恵ま

れた時姫を超えることはできなかった。そのため初瀬（はせ）や石山等に物詣（ものもうで、社寺に詣でること）を重ね、出産を祈ったがかなわず、40 歳ごろに、通うこともまれになった夫から身を退（ひ）いて、晩年は鴨河（かもがわ）近くの中河の屋敷で過ごした。その後、986 年の内裏歌合（だいらうたあわせ）に道綱の代作を詠出（詩や歌を作り出すこと）するなど、歌人として活躍していたが、995 年 5 月初めごろ 60 歳余で没した。

[増田繁夫氏]

(4) 本朝三美人の一人

本朝三美人の一人と云われている。根拠は不明だが、和歌とかで美人をにおわせる歌を詠んで、**自分から言ったもの勝ちの要素も考えられるが**、本朝三美人はおいても、美人だったのは根も葉もないことではなかろう。

本朝三美人とは、衣通郎姫、藤原道綱母（藤原倫寧女）、光明皇后とされる。

・衣通（衣通郎姫）姫（そとおひめ）

記紀に伝承される女性で、日本書紀では、5 世紀前半の第 19 代とされる允恭天皇（いんぎょうてんのう、5 世紀前半）の妃（きさき、皇后・忍坂大中姫（おしさかののおなかつめ）の妹）とされる。

『古事記』では衣通郎女と表記され、允恭天皇の皇女・軽大郎女（かるのおおいらつめ）の別名としていて、別の人物の名である。大変に美しい女性であり、その美しさが衣を通して輝くことからこの名の由来となっている。本朝三美人の一人とも称される。和歌に優れていたとされる。

・光明皇后（701 年～760 年）

藤原不比等と橘三千代の娘

聖武天皇の皇后

孝謙天皇の生母である。

日本書紀・古事記に美人と表記されている。

・藤原道綱母（936 年？～995 年）

蜻蛉日記の作者。尊卑文脈（そんぴぶんみゃく、南北朝時代から室町時代初期に完成した公家中心の系図集）に「本朝第一美人三人内也」と書かれているが、根拠は判然としない。

なお、本朝三美人の他に日本の三大美人には各種ある。（*1）

*1. 各種日本の三大美人

○日本三大美人

・衣通（衣通郎姫）姫（允恭天皇の皇女、または妃）

・小野小町（出羽郡司・小野良真の娘）9世紀頃の歌人で、絶世の美女とされる。その根拠は不明で、全くの伝説だとの説もある。

・藤原道綱母（伊勢守・藤原倫寧の娘）

（尚、昔から言われている日本三大美人には、お市の方は入らない。）

○源平三美人

・常磐御前（源義経の母）

・静御前（源義経の妾）

・巴御前（源義仲の妾、女武者として伝えられている）

○戦国三美人

・お市の方（織田信長の妹、浅井長政の正室）

・細川ガラシャ（明智光秀の娘、細川忠興の正室）

・松の丸殿（京極高吉と京極マリアの娘、初めは武田元明の正室となり、寡婦となった後に豊臣秀吉の側室となった）※

○明和三美人（浮世絵師・鈴木晴信の作品）

・笠森お仙（かさもりおせん、谷中の笠森稻荷門前の水茶屋「鍵屋」で働いていた看板娘で鍵屋五兵衛の娘）

・柳屋お藤（やなぎや おふじ、浅草寺奥山の楊枝屋「柳屋」の看板娘）

・蔦屋およし（つたやおよし、二十軒茶屋の水茶屋「蔦屋」の看板娘）



○寛政三美人（浮世絵師・喜多川歌麿の作品）

左は高島おひさ、上は富本豊雛、
右下は難波屋おきた



- ・ 富本豊雛（とみもととよひな、富本節奏者。寛政年間頃の芸者）
- ・ 難波屋おきた（なにわやおきた、浅草寺近くの茶屋に勤めた若い女性従業員）
- ・ 高島屋おひさ（たかしまやおひさ、両国で煎餅屋を営んでいた高島屋長兵衛の長女。水茶屋の看板娘）

○大正三美人

- ・ 九条武子（くじょうたけこ、西本願寺第 21 代法主・明如の次女、教育者、歌人、後年には社会運動の活動）
 - ・ 柳原白蓮（やなぎはらびやくれん、大正から昭和時代にかけての歌人、駆け落ちの白蓮事件で知られる）
 - ・ 江木欣々（えぎきんきん）または林きむ子（明治期の法律学者・江木衷の妻で、詩、書、画、篆刻（てんこく、印章の作成）、謡曲と広い趣味と才人ぶりを発揮）
- 〈原島博氏（東京大学名誉教授、明治大学・立命館大学・女子美術大学等の客員教授の研究による〉

九条武子

柳原白蓮

江木近々



3. 主な出来事

年 度	主な出来事
934 年	『土佐日記』（とさにっき）は、日本最古の日記文学のひとつ。 紀貫之が土佐国から京に帰る最中に起きた出来事を綴った日記。
953 年	藤原兼家の嫡男、道隆（みちたか）生誕。（母；時姫）
954 年	『蜻蛉日記』の作者・道綱の母、藤原兼家と結婚する。（兼家 26 歳、道綱母 19 歳の頃）
955 年	兼家の次男・藤原道綱（母親；蜻蛉日記の作者）、生誕
956 年	兼家の三男・藤原道長（みちなが、母；時姫）生誕
967 年	・村上天皇、崩御 ・兼家、蔵人頭に就任
974 年	・藤原兼家が道綱母のもとに通ってくるのが途絶える。 ・この頃、藤原道綱母が回想して『蜻蛉日記』を書いたとされる。これを最後に筆が途絶えている。その晩年は寂しい生活を送ったとされるが、詳細不明。 ・藤原兼通（かねみち、藤原兼家の兄）が藤氏長者（とうしのちょうじゃ、藤原氏一族全体の氏長者のこと）、関白となる
977 年	・兼通、薨御
978 年	・兼家、右大臣となる
986 年	・兼家、摂政、藤氏長者となる
989 年	兼家、太政大臣に就任
990 年	兼家、死去
995 年	・藤原道隆、死去 ・藤原道長、右大臣に転任し藤氏長者となる ・5 月ごろ、道綱母死去。
997 年	・道綱、大納言に就任
1001 年	・中宮定子（父親；道隆）に仕えた女房、清少納言による『枕草子』（*2）はのころにはほぼ完成していたとされる。

1001～ 1006 年	この間に、中宮彰子（父親；道長）に仕えた女房、紫式部が『源氏物語』（*3）を執筆したと言われている
1007 年	・ 11 月、敦道親王が崩御
1008 年	・ 『和泉式部日記』（*4）を執筆。敦道親王が亡くなった後、喪に服しているこの 1 年の間に書いたとされる。 ・ 『更級日記』の作者・菅原孝標女、生誕
1008 年 ～1011 年	・ 和泉式部、中宮彰子の女房として出仕。 ・ 『紫式部日記』（むらさきしきぶにつき）は、紫式部によって記された日記とされる。藤原道長の要請で宮中に上がった紫式部が、1008 年秋から 1010 年正月まで、宮中の様子を中心に書いた日記と手紙からなる。
1059 年	・ 孝標女、回想録・『更級日記』を執筆。（「更級日記を調べる」を参照）

4. 蜻蛉日記

(1) あらすじ

- ・ 954 年秋 兼家と和歌の贈答がある。
- ・ 955 年 道綱が生まれる。9 月 兼家は他の女に通い始める。10 月 嘆きつつ一人寝る夜の歌。
- ・ 957 年 兼家の女が子を産んだと聞き嫉妬する。兼家から頼まれた衣を縫わずに返す。いさかいが絶えない。
- ・ 958 年 兼家の女が捨てられたと聞きよろこぶ。このころから自然美に眼を開く。
- ・ 964 年 母を亡くし、悲しさのあまり、道綱を連れて山にこもる。
- ・ 965 年 母の一周忌の法事を、ありし山寺で行なう。この秋、頼もしき人の遠くにいくを送る。
- ・ 966 年 春 3 月、をば君の病が重くなり、山寺に上る。とある夕べ、をば君を山寺に訪れ、しめやかに語らう。5 月、兼家と双六をうち、勝って物見に出ると約束する。秋、ふとしたいさかいの果てに、鐘鑄（かねい）を怒らせる。
- ・ 967 年 6 月、村上天皇の崩御、兼家はまもなく蔵人頭になる。天皇の寵愛あつかった女御に同情の和歌を送る。7 月、兵衛佐という人が山に上って法師

になり、若い美しい妻もその後を追って尼になると聞き、同情の和歌をその尼に送る。

・968年 9月、初瀬（はせ、奈良県桜井市の地名。古くは「はつせ」と呼ばれ、「泊瀬」とも表記した。初瀬山には西国三十三所第八番の長谷寺がある。）に行く。

・969年 正月、兄とこといみなどして遊ぶ。3月3日、節供（せつく）など試み、ここかしこの人を招く。3月25、6日のころ、西の宮の大臣高明の流罪を悲しむ。6月15日、兼家は御嶽詣（みたけもうで、京都伏見の稲荷神社のある稲荷山の山頂に参詣すること。）を思い立ち、道綱を連れて出発する。愛児の旅路の安泰を祈る。

・970年 3月10日のほど、内裏で賭弓（のりゆみ、賞品を賭けて弓を射る）のこと。道綱がそのなかに加わり、勝ったことを聞き喜ぶ。6月、唐崎（現大津市）に祓いに向かう。兼家の愛がしだいにうすらぐ。7月、亡母の盆のこと。石山（滋賀県大津市の石山寺）の10日ばかりこもる。11月、道綱元服。12月、人の心は次第に遠ざかりていわむ方もない。

・971年正月元日、兼家来ず。近江という女のもとに通うといううわさ。2日ばかりして兼家来るが、ものも言わない。2月、呉竹（くれたけ、はちく）を庭に植えて寂しさを慰める。4月、道綱と長精進（長期間にわたって行動や飲食を制限し、身をきよめて不浄を避けること）を始めようと思う。このころいちじるしく感傷的になる。6月、西山に渡る。兼家は迎えに来るが従わない。とある日、たのもしき人のためにむりやり連れられて京都に帰る。ふたたび初瀬に思い立つ。10月20日、屋根におく霜の白さに驚きの目を見張る。12月、雨の激しく降る日、兼家来る。愛児の成長を見て母らしい喜びを味わう。25日、つかさめしに兼家は大納言になる。3月詩人らしい眼で春を見る。かつて兼家の通ったことのある源宰相兼忠の女の腹に、美しい姫君のあとと聞き、その姫君を迎え、養女としようとする。6月、庭をはく翁の言葉に、詩人らしい耳を傾ける。

・974年 2月、紅梅の枝を兼家に送る。9月、中川に遊ぶ。12月、田上に詣でる。祓殿（はらえどの、祓えを行なう御殿）のつららに驚きの眼をはなつ。

・975年 正月15日、道綱の雑色（ぞうしき、蔵人の職位の一つ）の男の子らが儼（な、年中行事の一つで疫鬼を追い払うための儀式）をして騒ぐ。

・975年2月、右馬頭が養女に懸想し、作者にとりなしを頼む。

・975年11月、臨時の祭の日、ひそかに物見に出て、貴公子らしくふるまっている道綱の姿を見て父が衆人の中で面目を施しているのを見る。

(2)『うつろいたる菊』の原文と現代語訳

(塾予備校部門枚方本校の福山氏による)

九月ばかりになりて、出でにたるほどに、箱のあるを、
九月ごろになって、(兼家様が)出て行ったときに、文箱が置いてあるのを
(見つけて)、

手まさぐりに開けて見れば、人のもとにやらむとしける文あり。
手なぐさみに開けて見ると、よその女のもとに送ろうとした手紙が入ってい
る。

あさましさに、見てけりとだに知られむと思ひて、書きつく。
意外なことに驚きあきれて、せめて見たよとだけでも知られようと思って、書
きつける。

うたがはし ほかに渡せる ふみ見れば
ここやとだえに ならむとすらむ

疑わしいこと。よそのに送った手紙を見ると、
私の所へ来るのは途絶えようとしているのでしょうか。

など思ふほどに、むべなう、十月つごもり方に、
など思っているうちに、果たして、十月の末ごろに、
三夜しきりて見えぬときあり。つれなうて、
三晩続けて姿が見えないときがある。(来ると)そしらぬふりをして、
「しばし試みるほどに。」など、
「しばらくあなたの気持ちを試しているうちに(日が過ぎてしまったよ
けしきあり。

思わせぶりなことを(兼家様が)言う。

これより、夕さりつ方、「内裏にのがるまじかりけり。」とて出づるに、
私の所から、夕方に、「宮中に行かざるを得ないのだったよ。」と言って出て
行くので、

心得で、人をつけて見すれば、
不審に思って、人にあとをつけさせて様子をうかがわせたところ、
「町小路なるそこそこになむ、とまり給ひぬる。」とて来たり。
「町小路にあるどこそこに、車をお停めになりました。」と言って帰って来
た。

さればよと、いみじう心憂しと思へども、言はむやうも知らであるほどに、
思ったとおりだよと、とてもつらいと思うけれど、言いやるすべもわからない
でいるうちに、

二、三日ばかりありて、暁方に、門をたたくときあり。
二、三日ほどして、夜明け前ごろに、門をたたくときがある。

さなめりと思ふに、憂くて、開けさせねば、
あの人が来たようだと思うけれど、憂鬱なので、開けさせないでいると、
例の家とおぼしき所にもものしたり。

（兼家様は）例の女の家と思われるあたりに行ってしまった。

つとめて、なほもあらじと思ひて、

翌朝、このままではおれまいと思つて、

嘆きつつ ひとり寝る夜の あくる間は

いかに久しき ものとかは知る

嘆きながらひとり寝をする夜が明けるまでの間は、
どんなに長いものか（あなたは）わかっていますか。

門を開ける間も待てないあなたのことから、

おわかりにならないでしょうね。

と、例よりはひきつくろひて書いて、うつろひたる菊にさしたり。

と、いつもよりは改まって書いて、色の褪せ始めた菊に挿し添えた（ものを持
たせてやった）。

返り事、「明くるまでも試みむとしつれど、

返事は、「夜が明けるまでも様子を見ようとしたけれども、

とみなる召し使ひの来合ひたりつればなむ。

急用の役人が来合わせたので（すぐに去らざるを得なかった）。

いとことわりなりつるは。

（あなたが言うことは）しごくもつともですよ。

げにやげに 冬の夜ならぬ まきの戸も

遅くあくるは わびしかりけり」

本当に本当に（あなたが言うとおりの冬はなかなか明けず
つらいものだけれど）、冬の夜ではないまきの戸も、

なかなか開けてもらえないのはつらいことだと初めてわかったよ。」

さても、いとあやしかりつるほどに、

それにしても、全くどういうつもりなのか不審に思っているうちに、

ことなしびたる。

（兼家様は）素知らぬ顔をして（女のもとに通つて）いることよ。

しばしは、忍びたるさまに、「内裏に。」など言ひつつぞある

しばらくは、気づかれないように、「宮中に行く）。」などと言いつづけている
のが当然なのに、

いとどしう心づきなく思ふことぞ、限りなきや。

ますます不愉快に思うことは、このうえない。

単語と語句の解説

[遣らむと]	届けようと。
[むべなう]	「むべなく」のウ音便。
[十月つごもりがたに]	十月の末頃に。
[三夜しきりて見えぬ時あり]	三晩続けて来ない時があった。(当時は結婚する際に三晩続けて通う風習があった)
[夕さりつかた]	夕方頃。
[ものしたり]	行ってしまった。
[うつろひたる菊]	色変わりした菊。
[とみなる召し使ひ]	急な召し使い。
[いと理なりつるは]	全くもつともですよ。
[げにやげに]	全く本当に。
[おそくあくる]	「夜が遅く明ける」のと「戸が遅く開ける」を掛けている。

(3) 『蜻蛉日記』の目次

〔一〕序文

過去半生の時間がこんなにもむなしく過ぎて、まことに頼りなく、どっちつかずのありさまで暮している女があった。容貌といっても人並でもなし、思慮分別もあるわけでもなし、こんな役立たずの状態にいるのも当然だと思いながら、ただなんとなく毎日を過すつれづれのままに、世間に流布している古物語の端々をのぞいてみると、ありきたりのいい加減な作り事でさえもてはやされるのだから、人並でない身の上でも日記として書いてみたら、なおのこと珍しく思われることだろう、この上もなく高い身分の人との結婚の真相はどんなものかと尋ねる人がいたら、その答えの一例にでもしてほしい、と思うのだが、過ぎ去った長い年月のことは、記憶が薄れてはつきりしないので、まあどうにかという程度のあやふやな記述も多くなってしまった。

〔二〕右兵衛佐・藤原兼家の単刀直入な求婚

〔三〕その年の秋、兼家との結婚成立

〔四〕結婚成立に引き続く兼家との贈答

〔五〕父倫寧の陸奥守赴任 兼家の横川参詣

〔六〕道綱誕生 町の小路の女の出現

〔七〕桃の節供 続いて姉との離別

〔八〕時姫の所にも途絶えがちな兼家

〔九〕町の小路の女、男子を出産

〔一〇〕兼家の通い、やや常態にもどる

〔一一〕町の小路の女、兼家の寵を失う

〔一二〕長歌の贈答、胸中を兼家に訴える

- 〔一三〕 兼家兵部大輔、章明親王との交誼
- 〔一四〕 章明親王邸の美しい薄を請い受ける
- 〔一五〕 不安定な妻の立場に、はかなさを痛感
- 〔一六〕 母の死
- 〔一七〕 母の一周忌に琴を弾き、叔母と母を偲ぶ
- 〔一八〕 姉の旅立ち、形見に衣装を脱ぎ替える
- 〔一九〕 病気の兼家をひそかに見舞に行く
- 〔二〇〕 賀茂祭に時姫と贈答 端午の節会
- 〔二一〕 荒れていく家 荒れていく夫婦の仲
- 〔二二〕 稻荷と賀茂へ詣で、和歌を奉納
- 〔二三〕 かりのこを十重ねて、ふ子に贈る
- 〔二四〕 村上天皇の崩御 御代交替で兼家の昇進
- 〔二五〕 西の対に退出した登子と交情を深める
- 〔二六〕 初瀬詣で、往路、門出から寺まで
- 〔二七〕 初瀬詣で、帰路、宇治へ兼家の出迎え
- 〔二八〕 結び——あるかなきかのかげろうの日記

蜻蛉日記 中

- 〔一〕 年頭の寿歌三十日三十夜はわがもとに
- 〔二〕 作者の侍女と、兼家の侍とのたわむれ
- 〔三〕 西の宮の左大臣の流謫に心から同情
- 〔四〕 病気をして心細さに遺書をしたためる
- 〔五〕 愛宮（前左大臣高明室）に長歌を贈る
- 〔六〕 小一条の左大臣五十の賀の屏風歌を詠む
- 〔七〕 内裏の賭弓道綱の活躍と栄誉
- 〔八〕 来ぬ夜が三十余日、昼が四十余日
- 〔九〕 唐崎祓い
- 〔一〇〕 母子叙情、鷹を放つても慕いくる道綱
- 〔一一〕 石山詣で
- 〔一二〕 身辺の雑事の底を流れる暗澹たる心情
- 〔一三〕 兼家と近江との関係進み、門前を素通り
- 〔一四〕 憂愁の極に達し、父の家で長精進
- 〔一五〕 兼家の前渡しせぬ世界にと鳴滝へ立つ
- 〔一六〕 鳴滝般若寺に到着、兼家追って来る
- 〔一七〕 閑寂な山寺、叔母や妹のおとずれ
- 〔一八〕 兼家の使者、強く下山を勧めに来る

- 〔一九〕 兼家との交信 侍女たちの交信
- 〔二〇〕 見舞に來た親族の者との語らい
- 〔二一〕 道隆の來訪、またしきりに下山を勧める
- 〔二二〕 兼家によって強引に京へ連れもどされる
- 〔二三〕 帰宅、磊落な兼家は冗談を言いちらす
- 〔二四〕 またも兼家の途絶えがちな生活
- 〔二五〕 再度の初瀬詣で
- 〔二六〕 しめやかな人生觀照、中巻の結尾

蜻蛉日記 下

- 〔一〕 天禄三年、しめやかな気分の年頭
- 〔二〕 大納言に昇進した兼家の悠然たる風姿
- 〔三〕 「世の中いとあはれなり」と思うこのごろ
- 〔四〕 夢解き、道綱の将来の繁榮を占う
- 〔五〕 兼忠女腹の兼家の娘、志賀山麓に育つ
- 〔六〕 兼忠女の娘を養女とし兼家と父娘対面
- 〔七〕 過ぎゆく春、近火に兼家の見舞
- 〔八〕 八幡の祭見物 隣家の火事と後始末
- 〔九〕 道綱、大和だつ人に和歌をおくる
- 〔一〇〕 なにごころなき、つれづれの心境
- 〔一一〕 道綱と大和だつ人との若々しい贈答
- 〔一二〕 太政大臣の薨去、不幸な身は長生き
- 〔一三〕 はなやぐ兼家に対し、容色の衰えを感じる
- 〔一四〕 道綱の動靜、八幡の祭、また近火
- 〔一五〕 父倫寧の計らいで、広幡中川へ転居
- 〔一六〕 夢の通り路絶えて、年も暮れゆく
- 〔一七〕 道綱右馬助に就任、奥山の寺に参詣
- 〔一八〕 右馬頭藤原遠度より養女へ求婚の文
- 〔一九〕 遠度の來訪始まる、絵のようなその立姿
- 〔二〇〕 兼家は遠度の求婚を許す予定
- 〔二一〕 遠度はますます苛立って、訴嘆する
- 〔二二〕 遠度の熱意を、兼家がひやかす
- 〔二三〕 神社に和歌を奉納、端午の節供
- 〔二四〕 遠度求婚事件の絶頂から破局へ
- 〔二五〕 疱瘡の流行、道綱さいわい癒える
- 〔二六〕 太政大臣からの思いがけない和歌

〔二七〕賀茂の臨時の祭、久しぶりの兼家の姿

〔二八〕道綱と八橋の女との和歌の贈答

〔二九〕長かった人生を思い、日記の筆を擱く

卷末歌集

5. 『蜻蛉日記』の解説を紹介する

○平安中期の歌人藤原道綱母（みちつなのはは）の書いた回想録的な日記。道綱母の20歳ごろの954年、時の右大臣藤原師輔（もろすけ）の三男兼家（かねいえ）と結婚してから、974年に兼家の通うのが絶えるまでの、20年間の記事をもつ。上中下の3巻からなり、上巻末尾に「あるかなきかの心地（ここち）するかげろふの日記といふべし」の語があり、書名はこれに由来する。社会的に確固とした存在ではなく、**かげろうのようにはない身の上の日記**だという意味である。現存するこの作品の伝本は、いずれも江戸時代の写本であるが、そのうちで最古の江戸初期書写の宮内庁書陵部蔵本以下、すべて『蜻蛉日記』の書名をもつ。古くは藤原定家の日記にも『蜻蛉日記』と記されているけれども、また『遊士日記（かげろうのにつき）』（八雲御抄（やくもみしょう））、『蜻蛉記（かげろうのき）』（本朝書籍目録）とも記されている。内容は、摂関家（せっかんけ）の御曹司（おんぞうし）の兼家から求婚された道綱母が、大きな期待に心はずませて結婚し、翌年兼家の次男の道綱を生んだが、**兼家の以前からの妻や、次々と新しく現れてくる妻たちのなか**にあって、**夫の足が遠ざかること**による悲哀や、望んでいたような身の上が実現しない嘆きなどを繰り返すうちに、ついに兼家が通わなくなつて、夫婦関係が絶えるまでの結婚生活を記している。夫の兼家が多くの妻をもち、自分を訪れることが絶えたのを強く非難する記事が多く、当時の貴族社会における一夫多婦制の婚姻制度のもとで、弱者としての妻の立場から夫婦関係を描いたものである。また一面では、社会生活の場をもたない貴族女性が、身分の高い男性と結婚することで、**その社会的地位の向上を求めようとしたが、期待どおりには実現しなかった残念さ**を書いた、という性格をもっている。

この日記は、平安時代の女流文学が重要なテーマとした女性の立場を書いて先駆的な位置にあり、『源氏物語』もそのテーマを発展させたものといえることができる。

[増田繁夫氏]

○『蜻蛉日記』の内容は、摂関家(せっかんけ)の御曹司(おんぞうし)の兼家から求婚された道綱母が、大きな期待に心はずませて結婚し、翌年兼家の次男の道綱を生んだが、兼家の以前からの妻や、次々と新しく現れてくる妻たちのなかにあつて、**夫の足が遠ざかること**による悲哀や、望んでいたような身の上が実

現しない嘆きなどを繰り返すうちに、ついに兼家が通わなくなって、夫婦関係が絶えるまでの結婚生活を記している。夫の兼家が多くの子をもち、自分を訪れることが絶えたのを強く非難する記事が多く、当時の貴族社会における一夫多婦制の婚姻制度のもとで、弱者としての妻の立場から夫婦関係を描いたものである。また一面では、社会生活の場をもたない貴族女性が、身分の高い男性と結婚することで、その社会的地位の向上を求めようとしたが、期待どおりには実現しなかった残念さを書いた、という性格をももっている。

○辣腕政治家・藤原兼家と「愛」に餓えた妻・道綱母

・「一夫多妻」という夫婦のあり方は、現代の私たちにはなかなか理解しがたい。しかし平安女流文学を読むと、その実態の一端がうかがえる。

・中でも『蜻蛉（かげろう）日記』の作者、藤原道綱母（みちつなのはは）の結婚生活はきわめて興味深い。彼女は中流貴族の出で、息子である道綱の「母」としか伝わらない。それに対し、夫の藤原兼家（かねいえ）は関白までつとめ、あの道長の父親にあたる大物政治家だ。

・彼女が兼家の妻に迎えられたのは、たぐいまれな美貌と、歌人としての才を気に入られてのことだった。結婚は954年、兼家26歳、道綱母19歳の頃とされ、翌年に道綱が誕生している。兼家にはすでに、正妻・時姫や嫡男・道隆がいた。

・兼家は快活で魅力的な男性だったようだ。ただ、女性関係が派手で生涯、10人ほどの女性を妻や愛人にしたといわれ、道綱母を苦しめることとなる。

・この時代、上流貴族が多くの子をもち、とにかく子供がほしかったからである。息子であったなら自分の後継者やそれを支える役割を、娘の場合は皇妃（こうひ）に送り込み、皇子の誕生を期待するのだ。

・兼家の場合、主に正妻と一緒に住み、他の妻妾のもとに通う形態だったらしい。道綱母は並外れてプライドが高かったから、わずかでも兼家の訪問が減ると、平常心を失った。

・歎（なげ）きつつ　ひとり寝（ぬ）る夜の明くる間は　いかに久しき

・小倉百人一首で有名な彼女の作品である。愛する夫がありながら、独り寝を強いられる日々。その夜の長さに苦悶（くもん）するのだ。この「満たされない愛の渇き」こそが、彼女をして『蜻蛉日記』を執筆させた動機で、今日の私たちを引きつける文学的魅力でもある。

・こうした視点とは別に、「政治家の妻」としての道綱母を見てみたい。過去を振り返って書いた私小説という性格はあるにせよ、『蜻蛉日記』には、兼家の仕事ぶりや昇進についての話題がほとんど出てこない。

・政治史では兼家が兄・藤原兼通（かねみち）と藤原氏の氏長者（うじのちょうじゃ）をめぐる「骨肉の争い」を繰り広げて敗れ、左遷される悲哀を味わったことは有名だ。ところが、道綱母は気落ちした夫を配慮するような様子は見られない。

・また兼家は 986 年、花山天皇を騙（だま）して出家させ、娘（詮子（せんし））が生んだ一条天皇を即位させるなどの謀略もめぐらせている。手段を選ばない夫の強引な行動に、道綱母は何も感じなかったのだろうか。

・人だけの濃密な世界さえあればいいという自己中心的な妻をもてあましてながらも、その才気を愛し、少なからず気を使い続ける兼家。夫婦もいろいろあると、思い知らされる。

*2. 枕草子

「虫は」「木の花は」「すさまじきもの」「うつくしきもの」に代表される「ものづくし」の「類聚章段」（るいじゅうしょうだん）をはじめ、日常生活や四季の自然を観察した「随想章段」、作者が出仕した中宮定子周辺の宮廷社会を振り返った「回想章段」（日記章段）など多彩な文章からなる随筆である。平仮名を中心とした和文で綴られ、総じて軽妙な筆致の短編が多いが、中関白家の没落と清少納言の仕えた中宮定子の身にふりかかった不幸を反映して、時にかすかな感傷が交じった心情の吐露もある。

*3. 源氏物語

『源氏物語』は平安時代中期の 1008 年頃に成立した長編小説。20 ヶ国以上の言語に翻訳され、世界的にも高い評価を受けている。

○あらすじ

・第 1 部は主人公光源氏の愛の物語。桐壺帝の子である光源氏は、幼い時に亡くした母に似ている後宮である「藤壺」、すなわち父の後妻に恋焦がれ、愛してしまう。

源氏と「藤壺」の間には子どもが生まれるが、その子は桐壺帝の子として育てられた。さらに彼は、年上の「葵の上」との結婚、「空蝉」（うつせ

もとに、為尊親王の弟・冷泉帝第四皇子帥宮敦道親王（そちのみやあつみちしんのう）の消息の便りが届く。その後帥宮敦道親王と和歌や手紙などを取り交わし、また数度の訪問を受けるうちにお互いを深く愛する関係となり、最終的に和泉式部は帥宮邸に迎えらる。この間の**和歌の取り交わしと、この恋愛に関する和泉式部のありのままの心情描写**が本作品の大きな特色である。

『和泉式部日記』の後の和泉式部

和泉式部は敦道親王の召人（貴人のそばに召し使う人のこと。日本の平安時代においては、特に主人と男女の関係にある女房のことをさす）として一子・石蔵宮永覚を儲けるが、敦道親王は1007年に早世した。1008～1011年、一条天皇の**中宮・藤原彰子に女房**（朝廷や貴顕の人々に仕えた奥向きの女官もしくは女性使用人）として出仕。1013年頃、主人・彰子の父・藤原道長の家司（けいし、親王および摂関・大臣家などの家政をつかさどる職員）で武勇をもって知られた**丹後守・藤原（または平井）保昌（やすまさ）と再婚**（祇園祭の山鉾の保昌山（ほうしょうやま）は、保昌と和泉式部の恋物語に取材したもの）し、夫の任国・丹後に下った。保昌は左馬頭でもあったため、上京している際は和泉式部1人で丹後に滞在していた。

和泉式部は京都に戻った後、娘である小式部内侍（こしきぶのないし、女房三十六歌仙の一人、父；橘道貞）を失った。そして、娘の菩提を弔いつつ自らの往生も考えるようになり、播磨国閭教寺（えんぎょうじ）の性空（しょうくう）上人を訪ねて、女人往生のすべを乞うたという。性空上人の教えをもとに誓願寺に入ると、本尊の**阿弥陀如来に帰依して出家し、専意法尼**という戒名を授かった、という。

山鉾の保昌山

保昌が和泉式部に捧げる梅を持っている



和泉式部は恋の遍歴が多く、魔女的女性のようにもあり、現代でもいそうなタイプで、現代ならマスコミの恰好の餌食になっていただろう。現代人にとっても興味深い波乱万丈の生涯だったといえる。

6. さいごに

平安時代の「一夫多妻」という夫婦のあり方は、現代人の私たちにはなかなか理解しがたいと思っていたが、当時の女性にも納得されていなかったと分かった。愛し過ぎて、嫉妬し過ぎて「満たされない愛の渇き」に悶々とするところは、必ずしもプライドが高過ぎるとか自分勝手過ぎるとは言えないし、現代人にも相通ずるようだ。「一夫多妻制度」は、長く明治時代の中期まで続いていたが、男社会が後継問題を口実に女性たちに辛い思いをさせた悪制だったと今更ながらに思う。『蜻蛉日記』のあらすじを読んだだけで、作者の感情や生き方に共感できそうである。

追。『蜻蛉日記』をもっと知りたい方は、『蜻蛉日記』（角川ソフィア文庫）が現代語訳付きで読みやすいそうです。瀬戸内寂聴著『わたしの蜻蛉日記』（集英社文庫）や村井康彦著『平安貴族の世界』（徳間文庫）などを読むと、当時の世相や政治家・兼家の実像もあわせ見えてくるそうです。しかし残念ながら周辺の図書館では見つかりませんでした。

添付資料；「平安時代の主な文学年表」（「平安時代の主な文学年表—TOK2」より）

年代	作品名	種類	作者
814 年	■凌雲集（りょううんしゅう）	漢詩集	小野岑守（おののみねもり）など
818 年	■文華秀麗集（ぶんかしゅう）	漢詩集	藤原冬嗣（ふじわらのふゆつぐ）など
823 年ごろ	■日本霊異記（にほんりょういき）	仏教説話	影戒（きょうかい）
827 年	■経国集（けいこくしゅう）	漢詩集	良岑安世（よしみねのやすよ）など
900 年ごろ	■竹取物語（たけとりものがたり）	創作物語	不明
	■伊勢物語（いせものがたり）	歌物語	不明

905 年 ■古今和歌集（こきん 和歌集 紀貫之（きのつらゆき）など
わかしゅう）

935 年ご ■土佐日記（とさにっき） 日記 紀貫之（きのつらゆき）
ろ

951 年 ■後撰集（ごせんしゅう） 和歌集 源順（みなもとのしたごう）など

951 年ご ■大和物語（やまものの 歌物語 不明
ろ がたり）/原形成立

■平仲物語（へいちゅう 歌物語 不明
ものがたり）

974 年ご ■蜻蛉日記（かげろう 日記 右大将道綱の母（うだいしょうみちつなのはは）
ろ にっき）

980 年ご ■宇津保物語（うつぼ 創作物語 源順（みなもとのしたごう）説がある
ろ ものがたり）

■三宝絵詞（さんぼう 仏教説話 源為憲（みなもとのためのみ）
えことば）

985 年 ■往生要集（おうじょう 宗教本 源信（げんしん）
ようしゅう）

996 年ご ■枕草子（まくらのそう 随筆 清少納言（せいしょうなごん）
ろ し）

■落窪物語（おちくぼ 創作物語 不明
ものがたり）

1005 年ご ■源氏物語（げんじもの 物語 紫式部（むらさきしきぶ）
ろ がたり）/一部成立

	■拾遺集（しゅういしゅう）	和歌集	花山院（かざんいん）説 藤原公任（ふじわらのきんとう）説 藤原長能（ふじわらのながとう）説がある
1008 年ごろ	■和泉式部日記（いずみしきぶにっき）	日記	和泉式部（いずみしきぶ）説
1010 年ごろ	■紫式部日記（むらさきしきぶにっき）	日記	紫式部（むらさきしきぶ）
1013 年ごろ	■和漢朗詠集（わかんろうえいしゅう）	歌謡集	藤原通俊（ふじわらのみちとし）
1030 年ごろ	■栄花物語（えいがものがたり）/正編	歴史物語	赤染衛門（あかぞめえもん）説
1055 年	■堤中納言物語（つつみちゅうなごんものがたり）/一部成立	物語	小式部（こしきぶ）など
1060 年ごろ	■更級日記（さらしなにっき）	日記	菅原考標の女（すがわらのたかすえのむすめ）
	■夜半の寝覚（よわのねざめ）	物語	菅原考標の女（すがわらのたかすえのむすめ）説
	■浜松中納言物語（はままつちゅうなごんものがたり）	物語	菅原考標の女（すがわらのたかすえのむすめ）説
1080 年ごろ	■狭衣物語（さごろもものがたり）	物語	不明
	■とりかへばや物語	物語	不明
1086 年	■後拾遺集（ごしゅういしゅう）	和歌集	藤原通俊（ふじわらのみちとし）

しゅう)

1100 年ごろ ■大鏡（おおかがみ） 歴史物語 不明

■今昔物語集（こんじゃ 説話 源隆国（みなもとのたかくに）説くものがたり）

1126 年 ■金葉集（きんようしゅ 和歌集 源俊頼（みなもとのとしより）う）

1144 年 ■詞花集（しかしゅう） 和歌集 藤原顕輔（ふじわらのあきすけ）

1169 年ごろ ■梁塵秘抄（りょうじん 歌謡集 後白河法皇（ごしらかわほうおう）びしょう）

1170 年ごろ ■今鏡（いまかがみ） 歴史物語 不明

1187 年ごろ ■千載集（せんざいしゅ 和歌集 藤原俊成（ふじわらのとしなり）う）

1190 年ごろ ■山家集（さんかしゅう） 和歌集 西行（さいぎょう）

参考資料

- ・増田繁夫氏；「右大将道綱母蜻蛉日記」
- ・ウィキペディア
- ・塾予備校部門枚方本校の福山氏資料

以上